

DAS KAPITAL

2月学習会の案内です 第48回「資本論を読む会」

日時：2月27日（月曜日）
午後6時30分 Zoomで開催
「第16章 剰余価値率の種々の表式」

新年あけましておめでとうございます。1月30日の「資本論を読む会」は、「第15章 労働力の価格と剰余価値との量的変動」（p26-42）をやりました。

内容は「賃金と利潤」との「取り合い」（配分）の様々な変化を見ようとした章なのですが、のっけからなぜ「労働力の価格」（=賃金）と「剰余価値」（=利潤）と、次元の違う表現を並べて対比するのか？マルクスの真意が分からない—と言うところから始まりました。色々と解説書を読んでも、この章はサラッとまとめられていて「たいした箇所ではない」とでも言うかのように、解説のボリュームはチョットだけです。結局「よく分からない」ままT座長から「宿題！」とされました。

今回の一番キモは最終ページの「労働の強度と生産力が増加し、同時に労働日が短縮される場合」の、「剰余労働の消滅」テーマですかね。資本主義的生産形態の廃止、必要労働だけに制限された社会、云々。ここを得意テーマとするTakチャンが入院中で、病室から参加のため、論議も少し盛り上がり欠けたかもしれません。

今回の参加者は10名—4 S 3 K 2 T 1 Nでした。懇親会での話題は、ホットな知事選候補予定の池田まきの人物評、鈴木道政と立憲の道議会議員評価、斉藤幸平の新著「ゼロからの資本論」などで議論になりました。「みんなと一緒にやれば何とかできます」、新規参加を歓迎します。

☆「資本論を読む会」の最初からの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.coocan.jp/>「資本論を読む会」オープン・コーナーにあります。

レポーターから - anak ~~~~~



第15章 労働力の価格と剰余価値との量的変動

・(今回は検討外の2要因)①生産様式と共に変化する労働力の育成費

②男子か女子か、成年か未成年か、という労働力の自然的相違。

第1節、労働日の大きさと労働の強度とが不変で、労働の生産力が可変である場合

①労働日の大きさは、同じ価値生産物で表される。②労働力の価値と剰余価値とは、互いに反対の方向に変動する。

③剰余価値の増減は、労働力の価値の増減の結果であって原因ではない。

・リカードの混同(利潤率と剰余価値率)…剰余価値率 $=m/v=100p/100p=100\%$ 。利潤率 $=m/C=100p/500p=20\%$

第2節、労働日と労働の生産力が不変で、労働の強度が可変である場合

・労働の強度は、同じ時間内で労働支出が増加する。強い労働=より多くの生産物。

生産物の価値は変わらない。数が増加する。(生産力)高められることにより、より多くの生産物。しかし価値は低下。

第3節、労働の生産力と強度とが不変で労働日が可変である場合

①労働日の短縮→剰余価値を縮小させる場合は資本は労働力の価格を縮小させて「損害を避ける」

②労働日の延長→労働力の消耗の増大は、ある点までは「代償の増加」によって補償されるが、

この点を超えれば、消耗は幾何級数的に増大し、正常な再生産条件と活動条件が破壊される。

第4節、労働の持続、生産力、強度が、同時に変化する場合

(1)労働の生産力が低下して、同時に労働日が延長される場合…延長の程度によって、両方も増大することがありうる。

(2)労働の強度と生産力が増加し、同時に労働日が短縮される場合。

・労働日の絶対的な最小限界まで縮小すれば、剰余労働は消滅する。しかしそれは資本の支配下では不可能なことである。

・資本主義的生産形態の廃止は、労働日を必要労働だけに制限することを許すが、剰余労働の一部分が必要労働(社会的準備・蓄積原本の獲得に必要な労働)に数えられるであろう。

①すべての労働能力ある社会成員のあいだに労働が均等に分配されているほど…

②労働の自然必然性を一社会層が自己自身から他の層へ転化しうることが少なければ少ないほど…

③労働日の物質的生産に必要な部分は短くなり、個人の自由な精神、社会的活動のために獲得される時間的部分は大きくなる。

・労働日の短縮に対する絶対的な限界は、労働の普遍性である。

資本主義社会では、一階級にとつての自由な時間は、大衆の全生活時間を労働時間に転化させることによって産み出される。